



Nakba 1948 Palestine - Jaramana Refugee Camp, Damascus, Syria

## 第2章 パレスチナ分割

2020年9月3日校正

### 1 第二次大戦下のアラブ・パレスチナ

「1939年パレスチナ白書」実現に英国が腐心したのは戦争準備にあった。その頃の欧州は、1938年ナチス(国家社会主義独労働者党)のヒトラーが独軍の最高指揮権を握って以降戦乱は深まっていた。



Adolf Hitler addressing a rally in Germany, c. 1933.

Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei (NSDAP)

ナチス政権は1939年3月、チェコスロバキアを併合した。スペイン内戦はフランコの勝利に終わり、3月スペインも日独伊防共協定に加わった(スペインは1939年9月3日中立宣言)。4月に独はポーランドとの不可侵条約、英独海軍条約を破棄した。ヒトラーの反ユダヤ主義と連動した親アラブ政策に伊政権も同調した。そして英政府のバルフォア宣言・ユダヤ移民政策パレスチナ委任統治を非難し、独

伊政府は英支配下の中東諸国に英国からの離反を働きかけていく。英国はこうした情勢下アジア・インドへの戦略的位置にあるスエズ運河からペルシア湾の支配と石油利権を守るべく「39年白書」で政策転換を図り、アラブ王制諸国との同盟維持を目指した。その結果ヒトラーのユダヤ人迫害の激しくなる時期に英政府は「ユダヤ移民制限」をパレスチナで実行せざるを得なかったのである。

#### Invasion of Poland/Nazi Germany/World War II

1939年8月23日独は独ソ不可侵条約に調印してすぐ、9月1日ポーランドに侵略し第二次世界大戦が勃発した。9月3日英仏両国は対独宣戦布告を発した。米は中立の立場を表明した。独はポーランドを降伏させると1940年4月にはデンマーク、ノルウェーを侵略し5月オランダ、ベルギーも降伏させた。6月にはパリを占領し仏独休戦協定を結んだ。

#### Winston Churchill/Conservative Party (UK)



英国では、チェンバレン首相から1940年5月チャーチルが首相に就任した。40年には、北アフリカのアラブ圏アルジェリア、リビアも戦場と化した。リビアを制圧した伊軍が、エジプト侵略を目指し、41年2月には独軍もリビア・トリポリに上陸し本格的な英植民地下のエジプト攻略体制に入った。スエズ運河や油田地帯の戦略的争奪戦は連合軍と枢軸国軍による激しい戦争に拡大し、アラブ諸国と人民を巻き込んだ。41年春には独・伊軍がバルカン半島を占領し宣戦布告なしに独はソ連への侵略を図り独ソ戦も始まった。

翌年の41年12月6日、日本軍が真珠湾を攻撃し、この挑発は米国に宣戦布告させた。米軍は劣勢の欧州に参戦し1942年11月には英・米軍の反攻が北アフリカで始まり、43年5月までに独・伊軍は撤退を余儀なくされる。戦争

が始まると、前にも増して英仏植民地支配に抗して独立を求めるアラブ人民の闘いが広がった。反バルフォア宣言、反シオニズムはナチス独を支持した反ユダヤ感情ともなった。

アラブ民族運動の置かれた当時の条件の中では自然な流れであったと言える。それは日独伊の枢軸国の勝利を望む願いでもあった。すでにアラブの社会主義・共産主義潮流は、アミン・フセインーらパレスチナの民族主義者の反ユダヤ主義は認めないとして批判し、フセインーらとは一線を画していた。(英・ソ連の反ファッショ連合の影響で、パレスチナ共産党(PCP)は、パレスチナで41年に合法化されている。)イラクでは1941年4月1日、反英親独の民族主義者による軍事クーデターが起きた。英国やイラク王ファイサルを継ぐハシミテ王室らの外来権力支配に敵意をもつイラク在来の名望家や軍人ら民族主義者の決起である。



#### Rashid Ali al-Gaylani/1941 Iraqi coup d'état

バグダットの貴族で元首相のラシード・カイラーニーを首班とする政権が樹立した。この戦時下の反英クーデターはアラブ解放の先駆けとして各地のアラブ民族主義者は沸き立ったと言う。パレスチナを追放されていた、アミン・フセインーを含む各地のアラブ民族主義者やリーダーがイラク革命を祝賀してバグダッドにかけつけた。しかしこのイラク革命政権は60日という短命に終わった。

英国は反英政権が登場したことに仰天し、他への波及を阻止すべく介入を開始した。英軍はインド軍部隊を引き連れてイラク南部バスラに上陸し南からバグダッドに空軍とともに進軍した。ヨルダンにはクー

デターでイラク王室が逃げ込んでおり、アブドゥッラー王軍が英軍に呼応した。

英軍と英軍人グラブ・パシャが育てた、ヨルダン・アラブ軍団がカイラーニー政権を追い詰め60日間の権力奪取は5月29日潰された。カイラーニーはイランへ、フセイニーはイラン・アラブを経てベルリンへ逃れた。また1942年2月には、英軍はカイロのファルーク王宮を包囲した。エジプト王の親独政策に怒り宮廷派内閣の罷免を要求し他の民族政党ワフド党による組閣を強制したのである。

41年6月には英軍とドゴールの自由仏軍が、親独のヴィシー政権の下にあったシリア委任統治政府を支配した。この英軍部隊にはパレスチナのユダヤ人軍団が加わっていた。なぜならベングリオンは「39年白書」などないかのように、戦争で英軍の一部隊として闘い、戦争などないかのように「39年白書と闘う」(注1)と言う方針をとったので英国政府に反対しつつ反ナチの闘いで英軍と共同したのである。

ナチスの迫害は極限に達し、在欧ユダヤ人の多くは、ワルシャワのゲットーに押し込められ収容所に次々と強制連行された。こうした死の危機に直面し対決したユダヤ人たちは1943年4月から5月「ワルシャワゲットー蜂起」にたちあがり、哀しい膨大な数の犠牲者となった。この闘いは、ブントのユダヤ人社会主義者たちに導かれた闘いであった。1944年8月の更なる「ワルシャワ蜂起」へとつながっていく。



#### Biltmore Conference 1942

この戦争時、ベングリオンやワイツマンは米国にいて、米政府とシオニズムの共同を強化した。米シオニストら世界のシオニストリーダーを集め1942年5月12日ニューヨークのホテル・ビルトモアで、シオニスト特別総会を開いた。ここで、シオニストはパレスチナ全土にユダヤ人共和国樹立を決定した。さらにユダヤ軍の創設、「39年白書」の廃止、ユダヤ移民に対する制限の解除、移民管理は英当局でなくユダヤ機関が行うと決定した。

そして、この実行のため政治軍事的な闘いを開始していく。

独ナチスによるユダヤ人に対する迫害と虐殺が広く伝えられる中シオニストの要求は有利に作用していく。このビルトモア会議で明確に英国に妥協的なワイツマンではなく、強硬な「シオニスト左派」ベングリオンの考え方がシオニズム全体の流れとなった。そしてまたかつてシオニズムを批判した、強力な主体ユダヤ人のブントらはワルシャワ蜂起で虐殺されていた。

#### Warsaw Ghetto Uprising/Jewish Combat Organization

長沢栄治は著書「革命の遺産」の中で「ワルシャワゲットー蜂起の指導勢力(特にユダヤ軍事連合)は、ブント派の社会主義者であり、その結末は彼らの存在そのものの消滅と、政治思想の挫折を意味していた。ビルトモアとワルシャワ・ゲットー蜂起という、2つの出来事を分水嶺として欧米のユダヤ人社会における政治的主導権は、シオニズムの手に握られることになった」と述べている。(注2)

パレスチナ周辺では、戦時下民族独立を求めるアラブ人民の声は勢いを増した。英・仏軍に支配されたシリアでは総選挙要求とゼネストによって、独立を求める民族主義者や共産党らの闘いは続いた。仏は委任統治以来独立要求を弾圧し、自由仏軍の占領下で行われた1943年のシリア・レバノンの国政選挙でも仏の期待に反し民族主義者が勝利したのでシリア独立を約束しながら実行しなかった。





Bechara El Khoury/president of Lebanon

レバノンでも、やはり親仏派でない民族主義者、フリー大統領が選ばれた。新レバノン政府は仏の意に反して43年11月主権を取り戻す憲法改正を国会決議し11月22日「レバノン独立」を宣言した。ところが自由仏軍総督はレバノン大統領や閣僚を逮捕し議会解散を命じ、憲法を停止させたのである。この強権措置に民族独立の機運が高まり、レバノン独立のため7日間のゼネスト蜂起の準備に入った。英植民地への波及を恐れた英の介入で仏は諦めたので11月22日の「独立レバノン宣言」は達成された。

国際連盟は1944年2月、シリア・レバノンの仏の委任統治の終了を確認したが、自由仏軍はシリアでも44年に入るとシリア人の独立要求に空爆や襲撃によって弾圧した。多くのアラブ人犠牲者を出しながら仏軍は結局撤退を強いられた。1945年12月英仏両政府はシリア・レバノンからの段階的軍の撤退を表明したのである。46年4月シリアから12月レバノンから仏英軍が撤退しシリア・レバノンは、やっと独立国家として出発することができた。

一方パレスチナは委任統治のまま残された。シオニストの全土ユダヤ国家化要求があり、また他方でヨルダン・アブドゥラー王は英政府と強力に結び、イラク王室ともどもパレスチナ・シリアを含めて自らのもとに悲願の「大シリア王国」を復活させるよう画策し始めたのである。フサイン・ヒジャーズ王らを追放したサウジアラビアやエジプトはそれを認めない立場にある。

英国政府は分割し支配し、アラブにアラブを管轄させる新植民地手法で、第一次大戦以降の英支配秩序を温存するべくアラブ連盟の結成を促していった。国家概念を持たなかったアラブ圏は、英支配の中で国民国家として形成されており、アラブ連盟はそれを維持するのにのぞましいものだった。

1945年3月アラブ連盟が結成された。

第二次大戦の中で革命潮流は反英反植民地アラブ独立闘争を闘った。しかし、ユダヤ人とアラブ人のパレスチナ共産党内の矛盾は1941年PCPが合法化され一時和解しつつ解決しえず、1943年5月にコミンテルンが解散を決定するとこれを機にパレスチナ共産党は分裂してしまった。



National Liberation League in Palestine (NLL) / Bulus Farah/Haidar Abdel-Shafi/Mukhlis Amer/Emile Habibi/ Mufid Nashashibi / Emile Toma

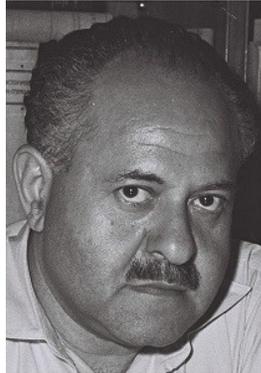
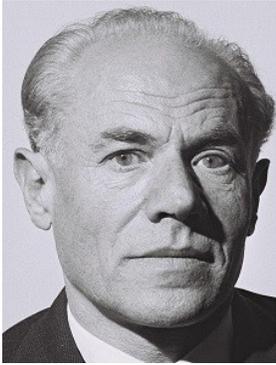
アラブ党员らはムーサ書記長らを批判し、44年初めに「民族解放同盟」(NLL)を結成した。また戦時下アラブ労働者の組織化は広がった。

Palestine Arab Workers Society (PAWS) / Sami Taha

最大組織は1925年結成のパレスチナアラブ労働者協会(PAWS)でPCPの分裂後1万人を超える労働者を組織した。NLLは共産主義としてではなく「民主的な政府と社会改革を伴うアラブ国家としてパレスチナ独立を求める開かれた組織」と規定した。(注3)

Federation of Arab Trade Unions and Labor Societies1942/Bulus Farah

NLLは、民族主義保守勢力の反ユダヤ主義を批判し、反シオニズムを明確にしてアラブ高等委員会との共同も目指した。PCPの残ったもののうち、ムーサ書記長は辞任しユダヤ人指導部が大会を開いて「パレスチナ共産党」を継承した。



Palestine Communist Party PCP/Shmuel Mikunis/  
Moshe Sneh

そして反英反シオニズム反植民地闘争を闘うとした。この新しいPCPはパレスチナ独立を目指し「二民族一国家」の民主的共存を求め、ベングリオンらのビルトモア綱領を拒否した。このように、パレスチナの共産党勢力はコミンテルン解散を機に「制約」が取り払われ主体的な党の基本路線が問われたのである。その結果が分裂であった。PCPは「反帝反シオニズム」の民主パレスチナ独立国を求めつつ、アラブ民族主義とシオニズムの疑

似的民族主義を党内に反映させ止揚できず引き裂かれた。



A demonstration by Palestinian Communist Party in 1945

しかし見方によってはコミンテルンの統一した階級闘争論の普遍性と言う観念を超えて現実から成長の段階に合わせて組織の形態を与えていく意味で新たな出発、「パレスチナ共産党」のユダヤ人たちとアラブ系の「民族解放同盟」の分立は意味がある。インターナショナリズムは、足下での他民族、他宗教や少数集団とともに闘う共同性として

問われていたからである。



First session of the United Nations General Assembly

1945年5月7日ナチス独降伏の後、6月26日連合50カ国は国際連合憲章に調印し10月24日、国際連合を発足させた。46年1月には第一回国連総会がロンドンで開催され国連安保理事会が発足した。戦後の枠組みが戦勝国によって作られていくのである。そのすぐあと、3月5日には米訪問中国連総会のチャーチル英元首相は「鉄のカーテン」演説で、東西対決、反ソ・反共戦略に基づく連合の必要性を訴えている。

のちにトルーマン米大統領が主導していくトルーマンドクトリンと同じ反ソ連の反共戦略である。国際世論においてもナチスの犯罪「ユダヤ人への民族浄化」政策が暴露されるにつれてユダヤ人への同情の受け皿としてシオニストは有利にそれを使った。戦争時にはシオニストは、「ハアヴァラ計画」などナチス・ドイツと秘密協定を結び、独ユダヤ人を選別したり貿易をしてきた張本人たちであった。

戦争中ユダヤ難民の急増に米国は受け入れ枠を拡大せずシオニストとともにパレスチナへと移民を誘導した。欧州によって引き起こされたユダヤ人虐殺と迫害の責任を植民地パレスチナとパレスチナ人に負わせる方向へと時代は進もうとしていた。1945年8月13日、世界シオニスト大会がロンドンで開かれユダヤ人国家樹立を求める決議を宣言した。第二次大戦における連合国側の勝利はシオニストという「加害者」を「被害者」に転じる舞台となったのである。こうした中、マハトマ・ガンジーは戦前も戦争中も戦後もシオニストを批判した。ガンジーはパレスチナの犠牲の上にユダヤ国家を作る考えを批判し各地のユダヤ人がそこに踏みとどまって闘う事をずっと求めていたからである。(注4)

## 2 戦後処理—ユダヤ人問題とパレスチナ



Clement Attlee/Leader of the Labour Party (UK)

第二次世界大戦は終わった。戦時のリーダーだったチャーチル英首相は45年7月の総選挙でアトリー労働党政権にとってかえられ1945年の4月ルーズベルト大統領の病死によってハリー・トルーマンが米大統領を引き継いだ。労働党は、チャーチル政権の「39年白書」を批判し、ホロコストを非難してユダヤ難民の無制限なパレスチナ入国を訴える親シオニズム政策を掲げて選挙に勝利した。

しかし労働党が政権に就くとシオニストの要求を許せばアラブ諸国を敵に回すというアラブ各国の反応を知り、公約を覆してこれまで通りの政策を続けた。米シオニストに支持されたトルーマン大統領は國務省の反対にも拘らず10万人のユダヤ難民のパレスチナ移民を受け入れるようアトリー首相に圧力をかけた。

しかし労働党政権は拒否した。パレスチナでは「39年白書」の撤廃・ユダヤ移民の無制限入国を認めよとシオニストのハガナ機関、イルグン、シュテルンらの対英テロが拡大し、45年10月対英戦争をシオニスト合同軍事組織(JRM)で決定した。

10月英政府はトルーマンにパレスチナ問題解決のための「英米調査委員会」の設置を求め1946年2月から英米調査委員会が調査し5月報告提案書を提出した。その内容は第一にパレスチナは国連信託統治協定実施まで英委任統治を続ける。第二にナチスの迫害にあった10万人のユダヤ難民のパレスチナへの入国を許可させる。第三にユダヤ人への土地譲渡制限令の廃止、第四にシオニスト民兵の武装解除勧告という内容であった。(注5)

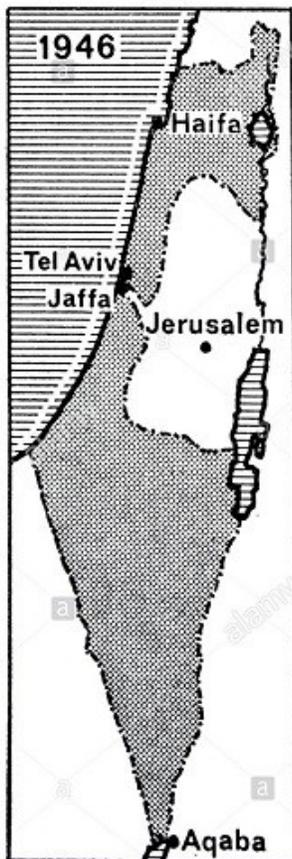
アトリー政権は、ユダヤ機関の武装解除が行われないうちは10万人の難民は受け入れないと表明した。シオニストのテロはこれまでに以上に激しく英政府にゆさぶりをかけた。6月英統治当局はパレスチナで鉄道爆破や暗殺誘拐を繰り返すイルグン、シュテルン、ハガナのシオニストテロ機関の壊滅を狙って戒厳令を敷き、逮捕捜索を行い2,700人を逮捕した。1930年代、英国がパレスチナアラブ人民蜂起を壊滅させたやり口である。テロは報復的に激しさを増し7月22日には英軍司令部のあったキング・デビットホテルが爆破され91人の英国人アラブ人ユダヤ人が殺された。イルグンによるテロであった。

米トルーマン大統領は10月4日のヨーム・キップル(ユダヤ教新年祭)で声明を発表しユダヤ難民10万人を直ちにパレスチナに受け入れるよう求めた。そしてさらに劇的な重大な表明をした。1946年8月にユダヤ機関(ジューイッシュ・エージェンシー)が提示したユダヤ国家の領域地図に全面的に同意を与えたのである。

この地図はシオニストのビルトモア会議決定の「全土ユダヤ国家化」の考えをとりやめ「米政府の立場を考慮して」パレスチナ分割を受け入れると表明してユダヤ機関執行委員会決定として「分割案」として作りあげたものである。

「37年白書」の地図を否定し、大ユダヤ国家のための地図である。これに米大統領が同意を与えた事はシオニストの領土的野心に全面的に同意した驚くべきものであった。著書「アラブの解放」の中で中東研究の泰斗、板垣雄三は「これは米国内選挙対策の色濃い決定であったが、これほどシオニストを勇気づけたものはなかった。第二のバルフォア宣言と呼ばれて

「37年白書」の地図を否定し、大ユダヤ国家のための地図である。これに米大統領が同意を与えた事はシオニストの領土的野心に全面的に同意した驚くべきものであった。著書「アラブの解放」の中で中東研究の泰斗、板垣雄三は「これは米国内選挙対策の色濃い決定であったが、これほどシオニストを勇気づけたものはなかった。第二のバルフォア宣言と呼ばれて



もよいであろう。(中略)翌年の国連決議へのルールはこうして敷かれたのである。」(注6)と述べている。

ここに「37年白書」の地図(ユダヤ領土20%アラブ領土70%)から47年国連決議へのユダヤ領土の極端な拡大の飛躍の秘密があったのがわかる。トルーマンがシオニストの望むユダヤ国家領域図を支持奨励したという事実こそ、英国から米国へとシオニストの後盾が変わったことを示す重要な転換だったのである。米の圧力とシオニストの激しいテロの中、引き続きアラブ諸国で利権を守りたい英国労働党政権はパレスチナから手を引く方向を目指した。英国は戦争によって疲弊しておりこれ以上パレスチナを統治する力もなかった。1月のベングリオンと英外相の話し合いも決裂した。

英政府は「バルフォア宣言」を発し、「サン・レモ会議」で暗躍して手に入れたパレスチナ委任統治支配を新たに結成された国際連合にその権限を返した。1947年2月18日のことであった。それでもヨルダン王アブドラーは引き続き英国に大シリア構想を求め続けた。



the United Nations Special Committee on Palestine (UNSCOP) from Mgr. Ignatius Moubarakis, Archbishop of Beirut, Aug. 5, 1947.

United Nations Special Committee on Palestine (UNSCOP)

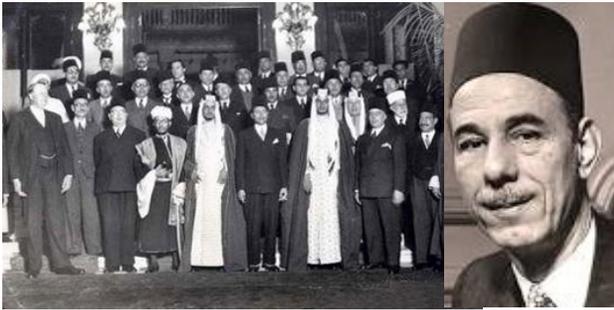
この英国の国連へのパレスチナの付託を受けて4月28日国連特別総会が開かれ5月15日「パレスチナ関係特別委員会(UNSCOP)」が設置された。このときのソ連のグロムイコ国連大使の演説はソ連の政策転換を示した。グロムイコは、シオニストテロに対する英統治当局の弾圧を非難しユダヤ人のパレスチナへの建国に

理解を示した。その上、アラブ人とユダヤ人の対等な単一国家を望むがそれができないなら分割の可能性を示唆した。これにはすべてのアラブの共産主義勢力は衝撃を受けた。「二民族一国家」を主張してきた彼らは路線の再考を迫られるのである。

そして6月以降UNSCOPはパレスチナや周辺国家、欧州のユダヤ難民収容所などを調査した。

パレスチナの人々、アラブ諸国、とりわけパレスチナのアラブ高等委員会はこうした国連のやり方は欧州に責任のあるユダヤ人虐殺の問題とシオニストのパレスチナ入植を1つにリンクさせパレスチナにユダヤ人国家を作る動きだと反対し、UNSCOPの調査を拒否した。パレスチナアラブの左派勢力、共産党潮流には調査に応じるべきだと言う意見はあったが結局拒否した。8月31日UNSCOPは報告案を国連に提出した。この提案ではトルーマン米大統領の同意したユダヤ機関の地図を下敷きとしてパレスチナを2つの国に分割する多数派提案と連邦国家を主張する少数派案が併記された。「多数派案」はアラブ国とユダヤ国に分割し、エルサレムを国連信託統治の自由都市とする案でカナダ、チェコスロバキア、グアテマラ、オランダ、ペルー、スウェーデン、ウルグアイの提案である。「少数派案」はアラブ、ユダヤ両自治州から成る連邦国家でユダヤ移民は向こう3年間入植能力の許される限り行い、それ以降はアラブ、ユダヤ、国連それぞれの代表協議で決定すると言うもので、インド、イラン、ユーゴスラビアの提案であった。この調査委員会の案が提出された後の47年9月26日、英政府は翌48年5月15日にパレスチナから撤退することを表明した。

どの案もパレスチナのアラブ高等委員会は拒否した。こうした事態にアラブ諸国はどうしていたのか？



Arab League/League of Arab States/  
Abdul Rahman Hassan Azzam

英国に促されアラブ諸国政府は45年3月には「アラブ連盟」を結成し、相互の対立や矛盾を国民国家の境界を維持した「アラブの統一」として演出した。エジプト、サウジアラビア、イラク、シリア、ヨルダン、レバノン、イエメンが調印したアラブ連盟条約は「加

盟国の連帯を強化し、真の協力をもたらすよう政治計画を統一し独立と主権を保持しアラブ各国の事情と利益を全般的に考慮する」(アラブ連盟規約第2条)と述べている。統一なのか独自利害なのか曖昧さに各国不一致の相互関係が現れている。しかし「反シオニズム」では一致して「バルフォア宣言」に反対しパレスチナの独立闘争支援が特記された。

英が支配の装置として促したアラブ連盟は反シオニズムの砦となった。そして戦時崩壊していたアラブ高等委員会が再建されるとそれを支持した。アラブ連盟は1945年の戦後初の「バルフォア宣言」記念日の11月は全アラブ地域を覆った「反バルフォア宣言」「パレスチナ独立要求」を支援するとともに「アラブボイコット」を決定した。パレスチナのユダヤ企業に対する経済ボイコットである。しかしアラブ連盟の国々の利害は違っていた。

ヨルダン王アブドゥッラーは獅子身中の虫である。彼は引き続いて英国に大シリア王国の実行を労働党政権に求めていた。ヨルダン王は46年3月には英ヨルダン条約を結んでヨルダンに2つの英軍基地を許可した。ヨルダン王は、英政府から国庫支援やヨルダン軍の装備資金も援助され中東における英軍事拠点としてヨルダンを安定させる道を選んだ。シリア、レバノンから撤退を余儀なくされた英軍はヨルダンに公然と戻ったのである。

UNSCOPの調査と報告が討議される47年には国連はパレスチナのユダヤ国家化計画を後押しするものと批判と危機感がアラブ中を席卷した。すでにその前からアラブ連盟は軍事的解決・交戦をめぐって会議がもたれるようになった。46年にはパレスチナ代表ジャマル・フセイニーから戦争の不可避性に備え10万人のアラブ統一軍の創設とパレスチナ亡命政権の樹立がアラブ連盟に提起された。ヨルダンの反対で決定は保留されたがパレスチナで起こりうる戦争に対する特別委員会の設置や軍事支援は採択された。(注7)

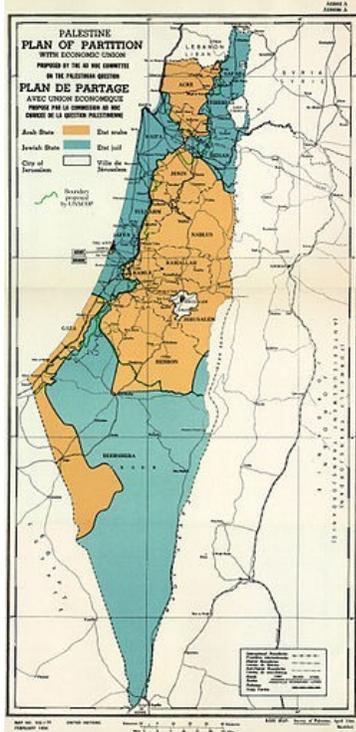
そんな中ヨルダン王は1947年8月「アラブ統一計画」として再び「大シリア構想」を発表した。英政府はこのアブドゥッラー構想に戦争中から好意を示してきた。英政府を介してシオニストとも協力関係にあるヨルダン王は、きたるべきパレスチナ問題の国連決議の前にシオニストや英米に構想を示しておく考えだったのであろう。エジプト、サウジアラビア、シリア、レバノンなどはヨルダン王の構想に反対していた。ヨルダン王はアラブ連盟よりも英国と同盟して英国の仲介のもと危険な考えを固めていくのである。

シオニストもまたパレスチナ人の追放やアラブとの戦争の不可避に備え始めていた。ベングリオンは軍事的準備のみならずアラブ側の統一行動を阻み、ヨルダンを切り崩す戦略を採用する。これらはシオニストの長年の英・ヨルダンとの交流と分析の結果であろう。国連決議前の47年11月17日、ゴルダ・メア(のちのイスラエル首相)はシオニストの指導者ベングリオンの指示を受けてアブドゥッラー王と秘密裏に面会し両者でパレスチナを分割し合うことに大筋で合意するのである。これはイスラエルの歴史学者アヴィ・シュライムがイスラエルの資料や高官インタビューによって書き上げた著書「鉄の壁」に明瞭に記されている。それによるとアブドゥッラーはパレスチナの国となる部分を自分の王国の属領とする考えをメアに述べている。まずパレスチナの市町村のリーダーであるムフティを抱き

込んでアラブ地域を占領し自分の王国に所属させる計画を披露してユダヤ側の反応を尋ねたと言う。(注8)

メアはユダヤ人国家の建設をアブドゥッラーが妨害する事なく軍事的対決を回避し国連の意向に沿うならば、ユダヤ人はその企画に好意を持つだろうと答えたと言う。「この合意は言うならば彼(アブドゥッラー)は後でパレスチナを奪いユダヤ人は自分たちの国を建国し、ほとぼりが冷めたところで両者は和平条約を取り交わすと言うものであった。」とシュライムは述べている。ここにシオニストとヨルダン王はパレスチナ国家を創らせないという合意が成立していたのである。

### 3 パレスチナ分割決議



UNSCOP (3 September 1947; see green line) and UN Ad Hoc Committee (25 November 1947) partition plans.

#### United Nations Partition Plan for Palestine

1947年11月29日国連総会決議が行われるが11月の国連総会が近づくにつれておかしなことが起こり始めた。当初総会決議は26日に予定され参加国の3分の2の評決によってUNSCOPの提出した2つの案のどちらかを決定することになっていて「パレスチナ分割案」が3分の2を占める事はありえないと考えられていた。米政府とシオニストの工作が激しく行われ、ハイチ、エチオピア、フィリピン、パラグアイ、ルクセンブルグの代表などとの話し合いで、巻き返しが図られた。(注9)

リベリアのゴム園所有者の米実業家はリベリア政府と話し、ハイチ政府の米法律顧問はハイチ大統領と電話しラテン米諸国は分割案賛成が「パンアメリカン道路計画」の実現の機会を早めるとほのめかされた。フィリピン代表の激しい分割案反対演説の後、強い圧力によって政府は演説したロムロ代表を交代させた。「米国に逆らうのはまずい」とシオニスト支持の26人の上院議員の連名電報を受け取ったためであった。こうして突如4カ国が「パレスチナ分割案」賛成に豹変し、7カ国が反対から棄権に転じた。タイは信任状が撤回されたと言う出所不明の電報で投票できなかった。(注10)

キューバ、ギリシャはイスラーム諸国共々反対を貫いた。スターリンのソ連は他の東欧諸国にも影響力を行使し分割案に賛成した。ソ連は英植民地支配は中東における第一の敵と見、アラブ王政やアラブ民族主義運動をブルジョア反動的と見ており、パレスチナユダヤ人の社会主義的建国に可能性を見ていたのだろう。

ソ連が、パレスチナ共産党やシオニストと反ファッショ統一戦線で共同して闘ったこともその一因だったのだろう。このソ連の行動はアラブ圏に激しい反共反ソの感情を民族主義運動にもたらしたことは言うまでもない。11月29日の国連総会は米・シオニスト連合の激しい巻き返しが奏功し3分の2のパレスチナ分割賛成票を「奇跡的」に獲得した。「奇跡」は奇妙な様々な財政的・政治的圧力によっていたのである。こうして国連総会は賛成33票・反対13票、棄権10票で「パレスチナ分割決議(国連総会決議181)」を採択した。決議は、「1、パレスチナをアラブ国家、ユダヤ国家、エルサレム特別国際管理地区に3分割する。1948年10月1日までにこれを実施する。2、英国は1948年8月1日までに委任統治を終わらせる」と記されている。国連加盟アラブ6カ国(エジプト、イラク、レバノン、サウジアラビア、シリア、イエメン)は反対票を投じたがアラブ諸国の主張は実らなかった。ヨルダン王は英政府の操り人形だとしてソ連がヨルダンの国連加盟に拒否権を行使していたので未加盟だった。ユダヤ機関はこの決議を受諾し、アラブ単一の独立国家を求めるパレスチナのアラブ高等委員会はこれを

拒否した。ユダヤ機関の示した地図を下敷きとした分割案であった。

この国連決議によって、これまで全パレスチナの7%未満のパレスチナの土地の占有しかしていなかったユダヤ人の国家はパレスチナ全土の56.5%を手に入れた。そこには55万8000人のユダヤ人と40万5,000人のパレスチナアラブ人が含まれユダヤ人口が多数派を形成する。この領土は海岸沿いと平野部シリア国境付近を含んでいた。ユダヤ国家には戦略的に重要な海岸や肥沃な地帯が与えられた。一方アラブ国家はこれまで、全パレスチナの93%の土地を占有していたのにパレスチナ全土の43.5%に縮小された。そしてそこに80万4,000人のパレスチナアラブ人と1万人のユダヤ人を擁する国となった。この国はガザ地区ヨルダン川西岸地区の山岳部やレバノン国境の北部ガリラヤ地方とヤファーを含むものであった。この決議181に対して反対票を投じたアラブ諸国や、決定権すら奪われていたパレスチナアラブ代表のアラブ高等委員会は3日間のゼネスト抗議を宣言した。この分割決議以降も国連はパレスチナで統制もせず英軍も撤退の準備に入り、パレスチナに住むユダヤ人とアラブ人の衝突を必然化させてしまうのである。イラン・パペ(ドイツ系ユダヤイスラエル人の歴史学者)の著書「パレスチナの民族浄化」では、この分割決議後すぐの12月初めにシオニストはパレスチナアラブの民族浄化を決定している。なぜなら分割決議のユダヤ人国家には49万5,000人のユダヤ人と43万8,000人のパレスチナアラブ人が住むとされておりアラブ人の追放なしにはシオニスト国家は望めないからである。(注11)

パレスチナアラブの側では、アミン・フセインの単一アラブ独立国家論に対し国際環境の力関係から譲歩し、次善の策として「二民族一国家論」は左派から提起されたがそれは主流になりえなかった。米欧側もソ連もアミン・フセインが再登場した事に好意を持っていなかった。フセインは親ナチとして戦後仏国に戦犯として拘留されたがエジプト政府の助力でカイロに逃げた人物として、連合国側は反動的人物と見ていた。もちろんアラブ世界では、のちのナセル・エジプト大統領のようにフセインは人気はあった。そういう風潮の中にあっただけでフセインの考えが主流で国連決議181の分割されたアラブ国家を活かす術は論外だと考えられていた。



Cominform/The Information Bureau of the Communist and Workers' Parties

革命潮流はどう考えたのか。そこにはソ連の動向が大きく影響を与えている。反帝・反シオニズム・反植民地闘争を指導しパレスチナ共産主義運動を育ててきたのはソ連を柱とするコミンテルンであった。反ファシヨ連合国が反ソ反共戦略に転じていく中でソ連は、47年コミンフォルムを結成し東欧の共産主義社会主義勢力の政権樹立を支援した。中東でもユダヤ人のパレスチナ共産党やパレスチナアラブ人の民族解放同盟(NLL)は「二民族一国家論」の反シオニズム反封建社会革命によるパレスチナ民主国家を目指してきた。コミンテルンはパレスチナ分割に反対してユダヤ人アラブ人の共闘を創り出してきたのではなかったのか。そのソ連の分割案賛成への転換はアラブ全体の革命潮流にとって衝撃であったし、以降ソ連ら革命潮流がアラブ人民の支持を得られない一因ともなった。



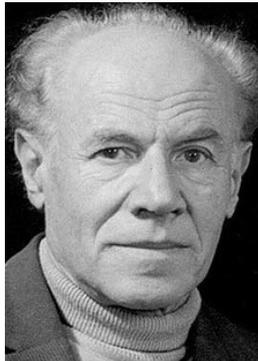
Andrei Gromyko/USSR

47年5月のUNSCOP設置会議でのソ連のグルムイコ国連大使演説による転換は当時の人々に「ソ連のバルフォア宣言」(注12)と言われるほど衝撃を与えた。アラブ諸国の共産主義・社会主義勢力の多くは、避難ユダヤ人の本国への帰還を求め英植民地主義からパレスチナを解放し自由で民主的なパレスチナ独立国家建設を求めていた。しかしソ連は「中東における英植民地支配を終わらせる」ことに戦略を定め反英テロと闘うシオニストを容認し反ファシヨ同盟してきた「社会主義(労働)シオニズム」に幻想を抱

いたご都合主義があったと思われる。戦後建国途上の東欧からシオニストがパレスチナへ非合法移民を送ったのもソ連との合意であろう。ソ連国内では当時党内闘争の一形態として「コスモポリタニズム」とユダヤ人批判もあり移民は奨励されたのかもしれない。反共反ソ戦略に対抗するにはアラブよりも反英ユダヤ国家に期待したのだろう。第3インターナショナルで各国党の国際主義任務の1つとして革命祖国ソ連の防衛を位置づけていた。

又、レーニン言うところの「他民族のために自らを犠牲にする覚悟」を求めつつソ連自身はその対極へと、つまりソ連の利益・戦略第一主義へと変質した。

とはいってもソ連東欧の生き残りをかけた大戦後の時期反共包囲の中、中東戦略は封建的ブルジョア支配層を中心とするアラブ高等委員会の民族主義は反動とみなしており、アラブ共産主義にも期待をもてない結果の分割案支持であったのだろう。



Palestine Communist Party/MAKEI (the Communist Party of Eretz Yisrael)/(The Israeli Communist Party)  
Maki/Shmuel Mikunis

このソ連の立場を支持したパレスチナ共産党(ユダヤ系)は47年の国連決議181を受け入れた。そしてイスラエル建国後は「イスラエル共産党(略称マキ)」に48年改称した。そして48年10月にはイスラエル領内に残ったアラブ人の民族解放同盟(NLL)の一部も合流してイスラエルにおけるアラブ、ユダヤ人労働者・農民の党としてソ連と友好関係を保持していく。イスラエル共産党はシオニズムに

は同調しなかったがイスラエル建国を認めた。そして同時に分割決議で約束されたパレスチナ(アラブ)国家の実現を求めて闘っていく。他のアラブ諸国ではソ連のイスラエル承認の前で共産党は衰退を余儀なくされつつ労働者階級の党として闘い続けた。ソ連が反シオニズムに戻るのは第一次中東戦争後のことになる。

1948 Jordanian Communist Party/ Munir Hamarana

#### 4 シオニズムの企みーパレスチナ民族浄化

1947年11月29日、国連決議181が採択されるとベングリオンはすでに述べたように公式にはそれを支持したが実際には12月初めにパレスチナアラブ人の民族浄化ー虐殺と追放ーを決定し戦争に力を注いだ。また、ヨルダン王アブドゥッラーを利用してアラブ諸国の分断を図りアラブ人密住地域はヨルダンに併合させてユダヤ国家を拡張しパレスチナアラブ国家消滅を目指した。

当時のパレスチナアラブ系の人口は140万人ほどで、人口の67%以上を占めており民族浄化以外ユダヤ国家の安全はないとしてアラブ人口の消滅を目指すのである。イラン・パペ著「パレスチナの

民族浄化」によると既にこの事態に備えて1930年代の早い時期からパレスチナの村の航空写真測量を始め、村・道路・水資源・村の収入源・社会構造・長老の名や他の村との関係・16歳から50歳までの男性の一人ひとりの詳細を調査記録し始めていた事実が提示されている。こうしたやり方を教えたのは英軍将校でイスラエル国防軍の前身ハガナを育てた人物でもあったと言う。(注13)

47年12月から計画的に「民族浄化の青写真」を描き、「ダーレット計画」に示されるようにパレスチナ人の村を襲い殺し無人化させ破壊していく様子を、パペは歴史資料に基づいて克明に記録を再現している。ベングリオンの指揮下、計画的戦略的蛮行であった。

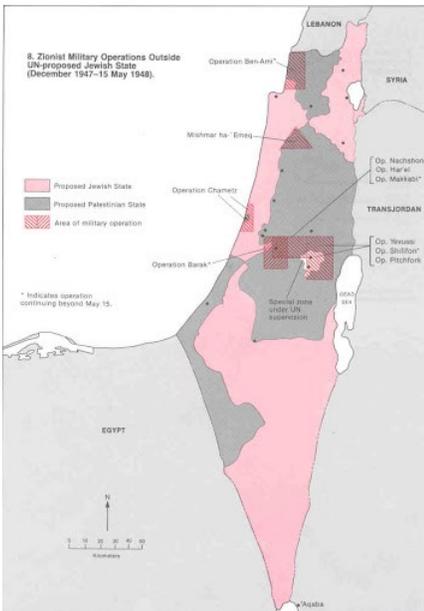


Secretary of the Arab Higher Committee, Beirut Telegraph, Sep. 6, 1948.

#### Arab Higher Committee

一方、アミン・フセイニーを指導者とするアラブ高等委員会はシオニズムと妥協する考えはなくアラブ諸国による交戦準備協議を行い抗議のゼネストを敢行しパレスチナのアラブ独立国家として宣言する準備に入った。アラブ連盟はパレスチナ分割に反対していたがパレスチナへの支援は経済支援と小火器の援助に限定していた。国連決議後すでにパレスチナ各地で衝突が起こり英軍の一部隊として闘ったユダヤ人部隊を含む大量強固な3万人を超えるシオニスト軍に対しパレスチナ側は約5,000人の志願の民兵たちが地域防衛に立ち上がった。それでも当初はアラブ民兵たちは、シオニストを追い払い互角に闘った。またユダヤ人たちに憤怒をぶつけて暴力行為にも出た。アラブ連盟はシオニストがユダヤ国家宣言を行えばアラブ諸国はそれを阻止するために交戦を辞さないと警告していた。アラブ側はいわば受け身の戦争準備であった。パレスチナではシオニストが宣戦布告も建国宣言もせず、静かにパレスチナアラブの村を襲い殺し追放しすでに内戦化していた。

ところが48年3月19日米トルーマン大統領が突然豹変して声明を発したのである。「11月29日に可決されたパレスチナ分割案を放棄する。パレスチナを暫定的に国連の信託統治に置くべきだ」と。これは、サウジアラビアに利権を持つアラビアン・アメリカの石油資本の圧力や国務省のジョージ・マーシャルらの助言によるもので、アラブ側の抗議の反映であったのだろう。このトルーマン声明に基づき、4月16日国連緊急総会が開かれた。しかしソ連がこの米の豹変を非難し分割決議の即時実施を要求し米国の変更を阻んでしまうのである。この件で筆者がアラブに着いた70年初頭までも「ソ連の二重の過ちがシオニストを利した」とパレスチナの右派から左派までソ連を批判し評判も悪かった。



#### Plan Dalet/Haganah

この米大統領の豹変には誰よりもシオニスト、特にベングリオンは危機感を持った。そして英委任統治の終了する前にパレスチナ人民族浄化を急ぎ進めるために、ハガナに作成させた「ダーレット計画」(注14)の実行を指示した。ベングリオンの指揮下、ダーレット計画によって4月1日から5月14日英軍撤退の日まで、ユダヤ国家に該当する地に居住していた40数万人のアラブ人たちが虐殺追放した。そればかりかアラブ国家予定地にも、ユダヤ機関は暴力に及んだ。「ダーレット計画」のもと13件の全面的なパレスチナ人虐殺追放作戦が行われたが8件までが国連決議によってアラブ人国家に割り当てられた地域で行われた。(注15)

その中の4月1日の「ナクション作戦」ではテルアビブからエルサレ

ムに至る回廊を分割し、それによってアラブ国家の分断を図ったが、アラブ民兵の反撃で失敗した。しかし4月1日を皮切りにハガナに並行してイルグンらも村々を襲い西エルサレムのアラブ住民地区を占領し、乗じてエルサレム旧市街の聖地の占領も試みたがアラブ側に阻止された。しかし、アラブ民兵とは比較にならない武器兵站装備と人員を揃えたシオニストは、征服の蛮行を欲しいままにした。シオニストは4月10日ディル・ヤシン村で254人の村の老若男女、子どもを虐殺し生き残った者を行進させ、「殺されたくなかったら出て行け」と脅して村々へ恐怖を伝播させ、パニックを起こさせながら征服を続けた。(注16)イラン・パペの研究によってこの「ディル・ヤシン村虐殺事件」のようなことがシオニストによって何度も繰り返されたことが暴露されている。

アヴィ・シュライムは、4月・5月とダーレット計画を実施したことでハガナは直接的に、そして決定的にパレスチナ難民問題発生の一因となったと告発している。シュライムはまたシオニストとヨルダン王の2回目の密談が、この虐殺の最中の5月11日に行われたことを記している。

アブドゥラー王は、この2回目の密談でパレスチナは分割せずユダヤ人が支配する地区は自分を王とする自治区にしてはどうかと提案している。ゴルダ・メアはそれを拒否し最初の約束のパレスチナ分割計画にこだわるべきだと迫ったと言う。(注17)

アブドゥラー王はメアに今や自分もアラブ連盟のパレスチナへの軍事介入に抗しきれないと述べている。メアはそちらが戦争を選ぶならユダヤ側は準備ができており、全力で闘うと述べている。シオニストが建国宣言を行えば戦争になる事は分かっており、米国のジョージ・マーシャル国務長官はシオニスト・ベングリオンに建国宣言を延期し、アラブとの武力決着を避けるよう忠告した。しかしすでに内戦を制したベングリオンは忠告を無視して、パレスチナ全土征服を急いだ。その上「ユダヤ国家独立宣言」は譲らないが、ユダヤ国家としての国境線は明示しないでおくことにした。国連が定めたユダヤ国家の境界を越えて領土を拡張する狙いがあったためである。

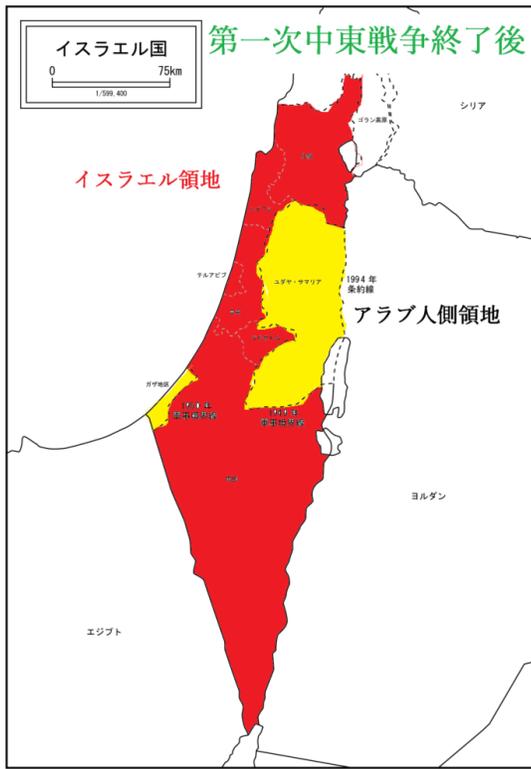


David Ben-Gurion declaring independence beneath a large portrait of Theodor Herzl, founder of modern Zionism  
Israeli Declaration of Independence

5月14日ハイファ港から英軍は撤退し実質30年にわたる英の支配は終わった。同日午後4時ユダヤ機関執行委員長ダヴィド・ベングリオンは12人の閣僚とともに「イスラエル国家独立宣言」を発した。この建国宣言の11分後にトルーマン米大統領は1番早くイスラエルを承認した。その時、米国代表はまだ当面のパレスチナの

信託統治を国連で主張し続けていたと言う。翌5月15日から、いわゆるパレスチナ戦争(第一次中東戦争)が始まる。しかし、それまでにすでにパレスチナは分割されたユダヤ国家以上に、シオニストが占領し約70万人が難民として故郷を追われていた。ソ連は米国より少し遅れて3日後にイスラエルを承認した。

## 5 パレスチナ戦争—第一次中東戦争



「イスラエル建国宣言」を受けて1948年5月15日エジプト、シリア、レバノン、ヨルダン、イラクの5カ国の正規軍がパレスチナに進軍した。このときのエジプト、ヨルダン、イラクは王制の親英国家で英政府は全体を掌握している立場にある。レバノン、シリアは国が独立して間もない。しかもこのアラブ側の軍の総司令官はなんとアブドゥッラー・ヨルダン国王であった。イスラエル側と密約している張本人が総大将なのである。しかし密約を知らないアラブ側のほとんどのものは、自分たちの勝利を過信していた。

この戦争は国連の3度の休戦命令で停戦しつつ交戦した。第1段の戦争は48年5月15日から6月10日の停戦発行を受けた6月11日までの28日間。第二段は7月8日に停戦が破られ18日までのいわゆる10日間戦争。第3段は7月18日からの停戦が10月15日に破られてシオニスト軍が攻勢をかけた49年1月7日までであった。この間国連安保理は11月16日に第三次停戦と翌年の休戦交渉を実現させていく。臼井陽の「中東和平への道」によると当時のアラブ正規軍はヨルダン王の総司令官のもと、総勢2万6,000人の兵力とされる。(エジプト軍7,000人

イラク軍4,000人、ヨルダン、アラブ軍団5,000人、レバノン軍2,000人、シリア軍4,000人、パレスチナ民兵軍4,000人(注18)、イスラエル側の兵力はハガナをイスラエル国防軍(IDF)と改称しその後、イルグンもシュテルンもその中に加えられるが、アヴィ・シュライムによると、ハガナの兵力は、3万5,000人で、装備も指揮系統も英軍の一部隊として戦争を経験しておりもともと優勢であった。

(注19)7月半ばの休戦では、世界中からシオニストが戦力を補充して兵力は6万5,000人に増え、12月には9万6,441人に膨れている。シオニストが宣伝しているアラブ側が圧倒的優勢の中、劣勢のユダヤは、「ダビデとゴリアテ」の倣いのごとく闘ったというのは、作られた神話にすぎず、もともとユダヤ側は、兵力、兵站力も格段に優っていたにすぎないことをシュライムはあかしている。

パレスチナ共産党は第一次休戦中、イスラエルのために戦争に備えてソ連の武器、弾薬、装備をチェコスロバキアから大量補給するのに一役買っている。シオニストは第一段のアラブ側の戦争の優勢に危機感を持ってユダヤ機関を通して英米から大量の義勇軍を投入したのである。なぜなら第一段の戦争でエジプト軍はパレスチナ義勇軍とともにガザから南部ネゲヴ砂漠に広がるパレスチナを制圧した。ヨルダン軍は西岸地区からエルサレム・リッダ方面まで進軍しレバノン、シリア軍はパレスチナ民兵とともにガリラヤ地方を防衛したのである。しかしアラブ側は緒戦から各方面軍が戦略的包囲で闘っていたわけではない。アラブ連盟のエジプト軍人を中心とする軍事専門家は、パレスチナ進軍共同計画を作成したがアブドゥッラー王の態度変更で中止された。ヨルダン王の狙いがパレスチナに対する領土的野心であることを各国とも疑っているが、まさか直接の密約まであるとは考えていなかったらう。ハシミテ王家のヨルダンとイラクはエジプト軍人の指揮を認めずエジプト軍も、アブドゥッラー王の指揮を受けず装備も不十分で時間を追うごとにアラブ軍の一体性は失われていき、のちに緒

戦の進軍で得たパレスチナ・ネゲヴ砂漠も結局失うことになる。

6月11日の第一次停戦までに、シオニスト軍は内戦で落としきれなかったユダヤ国以外の領域エルサレムの西側・地中海からエルサレムを結ぶ回廊を確保した。パレスチナの地形の中心部を固めたわけである。ヨルダン軍団はヨルダン川西岸から、エルサレム攻略に集中してエルサレム東側旧市街を占領した。ヨルダン王がイスラエル「密約」で求めた通りに、王国の領土部分の確保を目指したのである。第一次停戦成立後、国連総会の指名を受けてスウェーデンの外交官でユダヤ人迫害に抗して尽力したことで知られるフォルケ・ベルナドッテ伯爵が調停工作を行うことになった。6月27日ベルナドッテが示した和解案はアラブ側もイスラエル側も拒否した。それはイスラエルを含むパレスチナとヨルダンの連邦制案だったためである。そしてこの連邦案では、エルサレムや南部のネゲヴはアラブ側に譲ること。ハイファは自由港とし、リッド・エルサレムも自由港とする内容でアブドゥウラー王には願ってもないものだったが、イスラエルとアラブ連盟は拒否した。そして交戦が再発した。イスラエル軍は補充した兵力でエルサレム城壁の外側の新しい街の境にある、シオンの丘を確保してから米提案の安保理停戦命令に応じた。



All-Palestine Government (c.1950).

Amin al-Husseini/ Arab Higher Committee

第二次停戦は7月18日から10月14日イスラエル軍に15日に破られるまで続いた。この第二次停戦中の7月パレスチナのアラブ高等委員会はアラブ連盟と協議の上「パレスチナ臨時政府樹立」をカイロで宣言した。そしてエジプトが制圧しているガザに「全パレスチナアラブ政府」を樹立した。これはヨルダン王が、「大シリア構想」の野心でパレスチナを併合するのではないかと危惧を持つアラブ高等委員会とそれをバックアップしヨルダンを牽制しようとするエジプト・ファルーク王やサウジアラビアのサウード王らの思惑も働いたのだろう。この臨時政府の最高首脳に再びアミン・フセイニーがついた。この結果、ヨルダン王はますますパレスチナの併合によって自分の領土拡大の野望で対抗していく。アラブ側はエジプト軍とヨルダン軍が主力である。そのエジプトとヨルダンが反目したまま、戦争を継続する事は後にベングリオンに突かれることになる。



Folke Bernadotte

9月16日ベルナドッテ伯は、第二回目の調停案を国連に提出した。しかし翌9月17日ベルナドッテはシオニスト占領下のエルサレムを車で通行中4人のシオニスト、シュテルン・ギャングの6発の銃弾によって殺された。なぜならベルナドッテの公正なアプローチには、イスラエル側は我慢ならず圧殺したのである。犯人はのちのイスラエル首相となるシャミールらである。9月20日ベルナドッテ伯の遺言となった最後の調停案が公表された。ベルナドッテはパレスチナ人の帰還の権利をまずみとめている。そして、パレスチナとヨルダンを統合する連邦案は撤回し、現場の停戦ラインを正式な休戦協定に置き換えること、エルサレムは国際管理、ハイファ・リッド・エルサレムは自由港ネゲブの広範な地域から、エルサレムを除くヨルダン川西岸地域はパレスチナアラブの領土であるとした。これは11月29日の分割案よりもアラブ領土を広げたものとなった。「停戦ラインを休戦協定に置き換えた」ためであった(注20)



### The Second Bernadotte Plan

この案にベングリオンらは反対した。イスラエル側の兵力は9万人を超えており、アラブ軍を圧倒できるとして戦力を強化し、停戦中も欧州からの難民受け入れや、支援物資、兵力、軍需物資を搬入した。ベングリオンは停戦協定の領土を拡張するために10月15日停戦協定を破ってエジプト軍が制圧していたネゲヴ砂漠占領に乗り出した。ヨルダン王との密約から、ヨルダン軍がエジプトを支援しないことを知っていた。南部パレスチナ攻撃によってエジプト軍を退去させ戦闘の勝利を得ると今後は10月28日からイスラエル軍は北部のアラブ国の領土となる地域のシリア・レバノン連合軍を打ち破った。イスラエルが南部ネゲヴ砂漠から、北部ガリラヤ地方を占領したのち、米政府が中心となって安保理で第三次停戦と休戦交渉が11月16日決定された。国連調停官としてベルナドッテ伯を継いだのは米外交官ラルフ・バンチであった。彼は後にこの調停を成立させたとしてノーベル平和賞を受けるのだが調停策は不公平なものに過ぎなかった。ベルナドッテの調停案を利用して、イスラエル領土を拡大させることになる。第三次停戦ラインを「休戦協定ライン」(グリーンライン)としてイスラエルが駆け込みで停戦中に拡張した領土が、パレスチナ全土の78%に及んだまま認めることになった。

### 6 国連決議181のなし崩し消滅

国連決議181もパレスチナアラブ国の国境復活もアラブ分割国家の復活もしなかった。ロードス島で行われたこの休戦協定交渉を得て、パレスチナアラブ国はどこに行ってしまったのか。ベルナドッテ伯とは全く違ったラルフ・バンチの裁定となり休戦協定の前文では、「パレスチナにおける現情の休戦状態を永続的平和へと移行させることを促進する。」と記している。これはイスラエルの78%のパレスチナ占領を認めたものではなかったが、ここに地理的領土と境界の「現情肯定」の永続化を内包させる危険を作り出した。しかし、この休戦協定以前にベルナドッテ伯の調停案を継承するものとして彼が殺された後の1948年12月11日国連総会は「決議194」を採択した。この「決議194」でパレスチナ難民の「帰還の権利」を認め、かつ帰還を希望しない難民にその財産の補償も認めた。そしてこの決議194はまた3カ国(仏、トルコ、米)の構成する「国連パレスチナ調停委員会(PCC)」の設置を決めた。



The UNCCP (comprising France as Chair, Turkey, and the United States) meets with Israel's delegation, from left to right: Miss I. Broza, Tuvia Arazi, Eliahu Sasson and Gershon Hirsch.

United Nations Palestine Conciliation Commission (PCC)  
/ The United Nations Conciliation Commission for Palestine (UNCCP)

ここで決議181に基づく、パレスチナの国境、難民問題、エルサレム問題を解決するためである。この決議194採択の前日には、「世界人権宣言」を国連総会は採択している時代である。そこには「何人も各国境界内において自由に移動及び居住する権

利を有する」と宣言したばかりである。「決議194」に基づいて1948年に国連はパレスチナ難民事業部(UNRPR)を設立した。当初は難民の帰還までの時期を短期と見込んでいたので民間ボランティアなどを中心にパレスチナ難民支援を行った。が、イスラエルの占領が長期化したために、対応できず国連機関自身が担うことになった。



UNRWA founded 1949

The United Nations Relief and Works Agency for Palestine Refugees in the Near East (UNRWA)

こうして1949年12月8日国連による非政治的人道機関として、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)が設立された。UNRWAが行った49年9月時点の集計では、パレスチナアラブ人口140万人の人口のうちパレスチナ難民は72万6,000人が登録されていた。パレスチナアラブ側の推計では85万人を数えている。

「決議194」に基づくPCC交渉の進展のない結果がUNRWAを創設させたのである。アラブ側はこのUNRWA設立が「帰還の権利」をなし崩しに難民の永続化につながることを警戒し釘を刺してきた。イスラエルは「国際難民機関」の関与に反対し政治的権威のないUNRWAを結局承認した。「国際難民機関(IRO)」は難民の帰還の権利をまず求めるからである。アラブ国家側はイスラエルが「休戦協定」のままパレスチナを占領し続け、各国に避難した難民をその国に同化させてパレスチナ問題を終わらせようとする、イスラエルと米国の政策に反発しつつも自分の国の取り分の交渉を進めることでアラブ民衆を怒らせた。

PCCによるローザンヌ会議はその役割を果たせなかった。イスラエル側は、占領地を返そうとせず、イスラエルとヨルダンがエルサレム占領を譲らず、難民問題についてイスラエルは「アラブ住民が勝手に出ていった。イスラエルに責任は無いし、帰還は認めない」と言い張った。アラブ側はパレスチナ難民の帰還問題が会議の第一歩の交渉として譲らなかった。その一方でロードス島でイスラエルと各国間の休戦交渉が進行しイスラエルの占領をそのままにして、各国別に休戦協定を成立させてしまった。その結果PCCは、なし崩しに力を失っていく。当初から誰かに意図されたものか、休戦協定交渉とPCC交渉の議題を分離させたことが失敗を作り出し、イスラエル占領のままの休戦を許した。ヨルダン政府は49年4月に休戦協定に調印しヨルダン川西岸地区を東エルサレムとともに、手に入れた。ガザはエジプトの管理下に入った。49年5月11日イスラエルは米国の後押しとソ連の容認のもとで国連への加盟が認められた。なんと不当なことであろう。ここで国連は誤りを犯したと言っている。国連は自ら決議した181決議のパレスチナ分割を放置しイスラエルの占領を「休戦協定」として許したままイスラエルの国連加盟を認めたのである。PCCが破綻するのもこの二重底のようなカラクリにある。イスラエルの占領も、「帰還の権利」拒否も許されて国連加盟したのにシオニストがPCCに従うことなどありえない。休戦協定をPCCと分離したのは意図的シナリオではなかっただろうか。

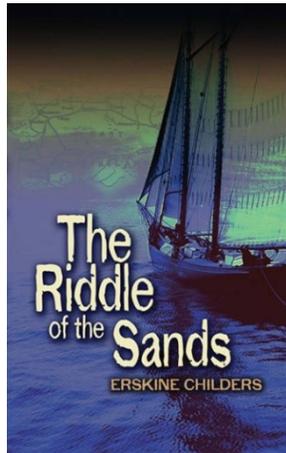
後の1952年になってPCCは「決議194」の履行は当事者たちの態度が本質的に変化するかどうかにかかっている」と言う報告後、役割は国連へ戻された。その結果48年12月の「決議194」は以来、今日に至るまで毎年12月、国連総会で「パレスチナ難民の帰還の権利」として再確認している。つまりベルナドッテ伯の死とともに、パレスチナアラブ国の分割を主張する国連調停官が失われたためにパレスチナアラブ国構想は幻となった。とは言えベルナドッテ伯の遺産であるパレスチナ難民の帰還の権利を主張した「決議194」は今も生き続けているのである。分割決議したアラブパレスチナ国家建設を訴える国はなかった。ソ連は分割案のパレスチナ国家のために拒否権を持って、それを主張しなかった。アミン・フセインーらの、全パレスチナアラブ政府は全土解放独立国家を求めていたので決議181を前提とするアラブ国は要求していない。イスラエル共産党や、アラブ諸国の共産党はパレ

スチナの分割されたアラブパレスチナ国を求め始めたが、パレスチナやアラブ諸国の民衆は全土解放独立を求め共産党を非難した。全パレスチナアラブ政府は、ロードス島の休戦協定会議にもローザンヌのPCC会議にも参加資格は与えられず部分的パレスチナも要求しなかったのでイスラエルとヨルダンの思う壺に陥ったのである。

全パレスチナアラブ政府は拠点のガザでも、親英エジプト王制の制約で動けず当事者能力を奪われ崩壊の危機に至ってしまった。その上、アブドゥッラー王の招請を受けて、全パレスチナアラブ政府の閣僚がヨルダン政府の閣僚に鞍替えするものまで出た。ヨルダンは1950年4月東エルサレムを含むヨルダン川西岸約5,500km<sup>2</sup>の併合を公に宣言した。そしてヨルダン・ハシミテ王国の国民として西岸の80余万人のパレスチナ人に国籍を与えると公布した。パレスチナ問題を終わらせようとするイスラエルの企みに結局は同調した企てであった。

## 7 パレスチナ難民は何故生まれたのか？

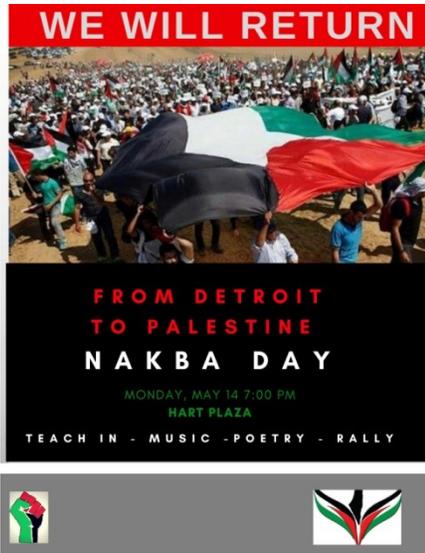
この第一次中東戦争によるパレスチナからの異常ともいえる大量の難民発生は、国際的に注目された。イスラエルは「アラブ人は戦争を仕掛けるために、彼らの指導者の命令によってパレスチナを離れた。」というプロパガンダ、あるいは「アラブ人の出国はすべてまったく予想ができないことであり我々は出国を止めようとアラブ人に懇願しても聴きいれられなかった」などとシオニストの影響下の報道機関で繰り返した。「もし、アラブ諸国が1948年5月15日、新しいユダヤ人国家を攻撃しなければ難民問題は発生しなかっただろう。」と国連でイスラエル外相までぬけぬけと主張し続けた。(注21) 歴史家のアヴィ・シュライムは、5月15日のアラブ軍との戦争前にすでに70万人のパレスチナ難民が発生していることを指摘している。



Robert Erskine Childers/The Riddle of the Sands  
また、アイルランドのジャーナリスト、アースキン・チルダーズは、当時BBC放送が、1948年のすべての中東の放送を傍受しており、その記録、さらには米国傍受機関の記録すべてをチェックした。そしてアラブ側からイスラエルの主張するような出国命令も、アピールも示唆さえなかったことを明らかにした。逆にアラブ側はパレスチナ民間人に対し、現地に留まるようはっきりと命令を繰り返しており、ヘブライ語の放送さえ踏みとどまることを訴えているアラブ放送に言及していたという。(注22)

パレスチナアラブ人は、すでに述べたようにシオニス

トの民族浄化作戦によって早くから第一次中東戦以前に犠牲にされていたのであった。パレスチナ全土の97%以上を占有していた、パレスチナ・アラブ人はイスラエル・シオニストにやられヨルダン王政にやられ犠牲にされた。そして米・ソ大国を中心とする国際社会の中で、全土の43.5%の決議されたパレスチナアラブ国さえも失ったまま戦争が終わり、自分たちの大半が難民となって全てを失ったことを知るのである。パレスチナアラブ人は、イスラエル国に生き残った人々、ヨルダン領に併合されたパレスチナに在った人々、そしてパレスチナを離れざるをえず、隣接諸国に難民となった人々の3つの条件下の暮らしを強いられたのである。



## Nakba Day

1948年5月15日は「パレスチナのナクバの日」として刻まれている。1920年が「アラブのナクバの年」であったように決定権を奪われ、軍事、政治力で、そして財力で服従を強いられてきた歴史をこの日に刻んでいる。71年に筆者がベイルートに着いた年の5月15日「ナクバの日」は、ベイルートのシャティーラ難民キャンプを始め、北部トリポリ、南部サイダやラシャディーア・キャンプなどの当時15あったパレスチナ難民キャンプで毎年行事が行われていることを知った。ベイルートのシャティーラ・キャンプには、世界各国から代表団や大使、アラブ諸国、東・西欧州の連帯組織が集い、パレスチナ青年・少年の武装行進や少女たちの民族舞踊や歌や楽団に拍手と連帯で称えていた。

この日は、パレスチナの人々にとって、ナクバを決して忘れず、パレスチナへの帰還を誓い闘いの決意を固める日である。パレスチ

ナ難民キャンプのどの父親も母親も、シオニスト軍がどのように家を破壊し、脅し、国を追われたのか、残してきた家の鍵を首からかけて握りしめながらナクバの日の惨状を語ってくれる。パレスチナアラブ人がパレスチナ全土解放を要求するのは、歴史的権利がある。また、軍事的にアラブ側が敗れたとしても、イスラエルが78%のパレスチナを占領して終わりにすることはできない。休戦協定交渉時にパレスチナ分割を決めた国連決議181の実行を国連が行動し強制的に実現すべきだった。これは次善の策として戦争敗北後のアラブ連盟も求めていた。

しかし、イスラエルの占領を「占領地」として認めつつ、「休戦協定」のまま許し、国連加盟をイスラエルに許すという米ソの歴史的過ちが、現在に至るイスラエルの占領を合法化していったのである。ここに戦後秩序の不安定の出発点が中東におかれた原因があった。また、全パレスチナアラブ政府は、シオニストとヨルダン王政によって排除され結局消滅に至らざるをえなかった。「親独戦犯」と追及されたアミン・フセイニーを戦後もリーダーとして求め、国際社会に頓着しなかったパレスチナアラブの民族主義勢力は、あまりに即自的で戦略も戦術ももちえなかった。「アラブ民族」の名で、封建王政や支配層は、自らの利権、名誉を築こうとしたというのに、アラブ・パレスチナの民衆は、アブドゥッラー王の密約の事実関係を長い間知ることはなかった。しかし、パレスチナ国家を消滅させるイスラエルの片棒を担ぎ、全パレスチナアラブ政府を足蹴にし、消滅させた大きな責任があることを知っていた。パレスチナ人たちは、米欧に恭順して特権を得たヨルダン王制のもとで安定して暮らすことを考える者よりも民族の独立を求める者たちのほうが大きな勢力であった。アラブ諸国でも民族、独立のために米欧植民地と、その傀儡王制はいらないという声が第一次中東戦争の敗北の反動としてより強く広く人々の間に民族主義を生んでいくのである。アラブ民族主義は、パレスチナ民族主義としてより先鋭化していく。1951年7月20日、エルサレムのアル・アクサーモスクに礼拝に訪れたアブドゥッラー王は、パレスチナ民族主義者によって暗殺されるのである。この時孫のフセインは祖父に同行していて暗殺の瞬間を見ている。この若い暗殺者のパレスチナ人たちは、アミン・フセイニーを支持し批判し、「アラブ民族主義運動(ANM)」を結成し、アラブの反帝反植民地闘争を力にパレスチナ解放をめざす若者たちの流れにつながっていく。(2018年9月23日脱稿)

## < 註解 >



- ① 「アラブの解放」(板垣雄三)平凡社 P31
- ② 「アラブ革命の遺産」(長沢栄治)平凡社 P244
- ③ 「アラブ革命の遺産」 P247
- ④ 「シオニズムーイスラエルとアジアナショナリズム」(G・H・ジャンセン)第三書館 P253～268  
シオニストは、西欧で影響力のあるマハトマ・ガンジーと友好関係をつくり、シオニズムに同意させようとしてくりかえし説得を試みたが、ガンジーは反シオニズムの姿勢を明瞭にくりかえし表明した。
- ⑤ 「砂漠に渴いたもの」(熊田享)第三書館 P57
- ⑥ 「アラブの解放」 P31～32
- ⑦ 「アラブ革命の遺産」 P293
- ⑧ 「鉄の壁」(上)(アヴィ・シュライム) 緑風出版社 P90～91
- ⑨ 「砂漠に渴いたもの」 P60
- ⑩ 「砂漠に渴いたもの」 P60
- ⑪ 「パレスチナの民族浄化」(イラン・パペ)法政大学出版局 P64
- ⑫ 「アラブ革命の遺産」 P290
- ⑬ 「パレスチナの民族浄化」 P34～35
- ⑭ 「パレスチナ問題」(PLO研究センター編 阿部正雄訳・解説)亜紀書房 P127～129—「Dプラン」(ダーレット・プラン)と称するパレスチナ占領の統合プランで、ユダヤ人に割り当てられた地域ばかりか、その外にあるアラブ人の地域の征服、支配のために、パレスチナ人掃討をシオニスト最高指導部が計画したもの。  
「アラブの解放」P124～151 収録 ワールド・ハーリディの「『D(ダーレット)計画』—パレスチナ征服のためのシオニストの基本計画」および「パレスチナの民族浄化」(イラン・パペ)参照
- ⑮ 「パレスチナ問題」—13 の作戦には名前が冠されていた。  
 (1)4月1日ナチション作戦 (2)4月15日ハレル作戦 (3)4月21日ミスパライム作戦  
 (4)4月27日シャメズ作戦 (5)4月27日ジェブス作戦 (6)4月28日イフタハ作戦  
 (7)5月3日マタテハ作戦 (8)5月7日マッカビ作戦 (9)5月11日ギデオン作戦  
 (10)5月12日バラク作戦 (11)5月14日ベン・アミ作戦 (12)5月14日ピトフォーク作戦  
 (13)5月14日シュフィフォン作戦
- ⑯ デイルヤシン村の虐殺に関し、岡真理は著書「ガザに地下鉄が走る日」の中で、デイル・ヤシン村の虐殺はこれまで254人とされてきたが、1987年ビルゼイト大学の調査によって、最大でも120人を超えないことが明らかにされたと記している。その理由は、虐殺の宣伝によってパレスチナ住民を追放させることと、他の同様のより多くの村の虐殺を隠蔽する狙いがあったということのようだ。

- ⑰ 「鉄の壁」(上) P93～94
- ⑱ 「砂漠に渴いたもの」 P80  
当時のアラブ正規軍の総勢は臼杵陽の他に、グラブ・パシャが 48 年のアラブ連合軍総数として 5 万 5.700 人と記している(エジプト 15.000、ヨルダン 10.000、イラク 15.000、シリア 8.000、レバノン 2.000 サウジアラビア 700、不正規軍 5.000)
- ⑲ 「鉄の壁」(上)P98
- ⑳ 「砂漠に渴いたもの」 P71～74
- ㉑「新しい出エジプト」(アースキン・チルダース)～「アラブの解放」収録 P62～64
- ㉒「新しい出エジプト」P65～66



**目次** <http://0a2b3c.sakura.ne.jp/sigenobu-pale-bz.pdf>



**第3章** <http://0a2b3c.sakura.ne.jp/p-ls-3.pdf>